

平成 22 年 5 月 10 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520005

研究課題名（和文）弁証論を手がかりとする道徳形而上学の再構築—道徳的自然主義を越えて—

研究課題名（英文） Reconstruction of the Metaphysics of Morals using Dialectics as a Clue: Beyond Moral Naturalism

研究代表者

宇佐美公生（ USAMI KOSEI ）

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：30183750

研究代表者の専門分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、 哲学・倫理学

キーワード：倫理学、道徳の基礎付け、道徳的自然主義

### 1. 研究計画の概要

本研究は、脳科学や生物学、認知科学、ゲーム理論などから得られた知見を背景に広まりつつある道徳的自然主義を、「道徳の基礎づけ」という問題機制の中で批判的に検討することを通して、道徳を形而上学の視点から評価し直す試みである。もとより道徳の形而上学的な基礎づけはこれまでも数多く試みられてきたが、それらはいずれも、いわゆる「内在主義」のアポリアを解決することができないため、道徳の「外在主義」の側からはその独善性を批判されたり、道徳的自然主義からは「宙に浮いた空疎なお伽話」と揶揄されることもしばしばであった。本研究では、カントが指摘する「理性の弁証論的特性」、とりわけ「無制約者」を求めようとする理性の特質の「実践的場面」での意義を手がかりにして、既存の「内在主義」の視点を越え、多文化的状況にも開かれた「道徳の形而上学的再構築」を目指すものであり、それによって同時に「道徳の基礎づけ」の問題に対する最終的な答えを与えることを目的にしている。

### 2. 研究の進捗状況

(1) 「道徳の基礎付け」問題に関する既存の試みを、「認知主義／非認知主義」「内在主義／外在主義」などメタ倫理学の視点から整理し、近代以降の基礎付けの多くの試みが、道徳に独自の価値を帰そうとして内在主義をとるが、他方でその独善性への批判があることを確認し、その様な批判を回避しつつ道徳の内在性と事実性を同時に説明する立場

として近年注目されている道徳的自然主義と進化論的倫理学の意義と課題を明らかにした。

(2) 道徳を進化の事実の中に位置づけようとする自然主義は、道徳に従うべき必然性を十分に説明できないだけでなく、その必然性を効果的に育み、公益性が確保される方法が見つかれば、それを拒む理由もないことになるが、それは他方で近代道徳の要件とされてきた「自由と責任」の意義の再考を迫ることになる。しかも現代の科学的世界像と脳科学など具体的成果が示唆しているのは、「古典的自由意志の困難さ」という事態であり、道徳の可能性も、そうした事態を前提に考えるべきであることが確認できた。

(3) 道徳の形而上学的基礎付けを試みたカント自身も、批判期以前から現代の脳科学や心理学に連なる機能主義的で自然主義的な人間理解を行い、道徳の公益性機能を肯定的に捉えていることを確認した。その上であえて道徳の形而上学を基礎付けようとするカントの議論を、「無制約者を求める理性の自然的性向」に着目することで批判的に検討した。その結果、カント流の道徳の基礎付け方の困難を確認しつつ、反面で基礎付け要求の秘密と、他の規範や規則には見られない道徳に特殊な性格の由来を説明し、道徳原理を吟味するための手がかりを得ることで、基礎付け問題に対する新たな展開の地平を拓くことができた。

### 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由) 近年の道徳的自然主義の成果を、ゲーム理論や進化論的生態学なども参照しつつ

つ整理し、その意義と課題を明らかにすることができた。自由論の現代的意義を検討することで、既存の道徳形而上学の課題を洗い出し、基礎付け問題の由来を当初予定していたよりも深く掘り起こすことができた。以上により新たな道徳形而上学の構築と道徳の基礎付け問題への回答の基盤が用意できたため。

#### 4. 今後の研究の推進方策

(1) カントが語る「理性の弁証論的性格」と「定言命法の導出方式」を手がかりにして「道徳原理」の形而上学的特質をおさえた上で、「公正さ」や「人格の尊厳」などの道徳的基本価値に対する新たな基礎付けを試みる。

(2) 同じく「理性の弁証論的性格」を手がかりに、道徳のもつ抑圧的や欺瞞的な側面がどのようにして生み出されるのか、その機制を批判的に洗い出す。

(3) 最終的に、近代以降の道徳が、なぜ自らの根拠づけを求めつつ、外部の根拠を遮断し、「宙に浮いたお伽噺」として揶揄されたり自己欺瞞として批判されるような構造を持つことになるのかを示すことで、基礎付け問題への回答を与える。

#### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

①宇佐美公生、カント永遠平和論の諸問題—カントの平和論は時代遅れか?、東北哲学会年報、査読有、25号、2009、63-70頁

②宇佐美公生、カントの実践哲学における自然主義の水脈について、岩手大学文化論叢、査読無、7/8号、2009、23-38頁

〔学会発表〕(計3件)

①宇佐美公生、自由意志の可能性、日本倫理学会、2009年10月17日、南山大学

②宇佐美公生、正義と感情—不正義感覚を手がかりにして、公共哲学京都フォーラム、2008年12月22日、神戸ポートピアホテル

〔図書〕(計3件)

①篠澤和久・馬淵浩二(編)、ナカニシヤ出版、倫理学の地図、2010、総頁289頁(18-47頁担当)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

なし